

飾らない海女の笑顔が極上のもてなし

兵吉屋のはちまんかまど

三重にいる海女はおよそ千人。
これは全国の約45%にあたる。
鳥羽市相差には約百人と、
県内で一番多く海女が活躍する。
漁場の広さと海が豊かであれば、
海女は暮らしていけるのだが、
新しいビジネスで笑顔がまた増えた。
海女小屋体験だ。

海女の暮らしを垣間見る

鳥羽市相差町に入り、あさり浜を目指す。堤防にぶつかると、海辺に建つ小屋から香ばしい匂いと笑い声が漏れる。海女小屋体験ができる「はちまんかまど」に到着だ。白い磯着に頭巾をかぶり、紺の久留米紬を腰に巻いた海女達が、手際よく貝を焼き、料理を運ぶ。海女小屋体験は、囲炉裏を囲んで海女が手焼きしてくれる魚介類を味わうもの。焼き上がりを待つ間は、現役海女とおしゃべりに

母親の禮子さんに相談。「私がするわ」と二つ返事で引き受けたことが、海女小屋体験のきっかけになった。

サザエ、アワビ、伊勢エビなど、海女が獲った海の幸を海女小屋の囲炉裏で焼いてふるまうと、外国人は大喜び。その頃は、相差漁港の奥にある鯨崎に海女小屋があり、目の前がまさに漁場。言葉は通じないが、その光景ともてなしに、観光客の評判があがっていた。「急やったから、ござを敷いて、かまど（囲炉裏）を囲んだんです。

しかし椅子で生活する外国の方にはつらいですし、一人ずつ座れる簡易なベンチを買ってきまして、それで縁をまわしたんです。そやけどアメリカの人、大きいですやろ。ベンチからひっくりがえってしもて、どうもあらへんけど、厚い板の椅子をつくったり、ちよつとずつ整えていきました」と当時を振り返って少し興奮気味に話

す禮子さんは、はじめてのことに對する不安などはない。いたっておらかなのである。日本の文化を身を以て体験できるとあって、その後、ヨーロッパや東南アジアと海外の客は広まっていた。「デイスカバリーチャンネル」の取材を受け、禮子さんの海女漁の様子が放映されたこともあり、問い合わせもひっきりなし

に入るようになった。

そして、鯨崎の小屋では収まりきらず、あさり浜に場所を移し、海女小屋をつくった。アクセスも便利になり、バリアフリー設計で、三つの部屋を合わせると百人まで対応できる。仲間も増え、二十人ほどの海女がここを手伝う。兵吉屋に接客マニユアルはない。大切にしてるのはもてなしの心だ。

笑うことが長生きの秘訣

一弘さんは、この海女小屋体験で高齢で漁をする海女の引退を遅らせることができればいいと考えていたが、それ以上の効果があった。海女自身が生き生きしているのだ。「たくさんの人に出会って、いろんなことを学べて、自分も張り合い出る」と、自分たちが獲ったものをおいしそうに食べてくれる姿を見ることが、何よりも幸せを感じられるという。「うちにおつてもこんなに笑わへん」、「ここに来るのが楽しみ」と、まさに生きがいの場となった。「話すことによって、自分たちの仕事に対して誇りも持てる」と一弘さん。地元の財産である海女文化を次の世代につなげたいと熱心だ。

相差町内には、海女の守り神として信仰を集める「石神さん」がある。今では「女性の願いなら必



上／楽しい時を過ごし、お帰りはみんなでお見送り。海外からの客には、その国の国旗を振って別れを惜しむ 下／囲炉裏で焼いたサザエ、大アサリ、桜鯛貝に匂のアワビ

花が咲く。素潜り漁や海辺の生活は興味深い。
「今はウェットスーツがあるけど、海女を始めた頃は木綿の磯着。まだ冷たい海にどぼんと飛び込んで、こんな商売知らんと思った」と、六十年以上前の三月の海を思い出して話す。かと思えば「この前の漁は霨があつて何にも見えへんでな。どこ行つてしまふかわからんようになるで、何にも獲れへんだわ」と海に身ひとつで臨む海女漁の厳しさを漏らす。
食事がすむと、海女が集まり、輪になって満面の笑みで踊り出した。地元の相違音頭だ。

海女の里のビジネスモデル

今から十年前、旅行会社から「海女小屋を見たい」という打診が鳥羽市役所に入る。方々に聞いてみたものの、受け入れてくれるところが見つからない。それもそのはず、依頼はアメリカの観光客から。通訳がつくといえども、言語のハードルが、快諾してもらえない要因となった。それを聞いた兵吉屋の野村一弘さんは、海女である

ず一つは叶えてくれる」と全国的に知られるが、これも海での安全や大漁を願う海女が多い相違だからこそ信仰であろう。漁があれば「石神さんのおかげ」、また「龍宮さんに助けられた」と海女はいう。海女小屋の戸口には甘茶で墨をすって書いたお札が貼られている。これはムカデが入ってくるのを防ぐもので、魔除けの一種。旧暦五月五日の慣わしとして、屋根には菖蒲、麦、イタドリ、ヨモギの葉が載せられていた。

魚介を炭火で焼きながら、素潜り漁や海との暮らしを語る。リアルな海女の話から、漁の厳しさがうかがえる



海女小屋を片付けた禮子さんが向かったのは、じゃがいもの畑。「雨降る前に、ひいとかな」。半漁半農で暮らす海女はどこまでも働き者なのだ。



Data

兵吉屋
海女小屋 はちまんかまど

三重県鳥羽市
相差町1094
☎0599-33-6145
(完全予約制)

<http://amakoya.com/>



1.旧暦の慣わしは相差のあちこちで見られた 2.魔除けの札は逆さまに貼られている 3.昭和6年生まれの子と息子の一弘さん、孫の一貴さん 4.「病気はひとつもしやへん」と畑作業に精を出す禮子さん 5.相違音頭の披露に手拍子がおこる 6・7.壁には海女の商売道具